

島根県立大学出雲キャンパス
紀要 第11巻, 43-48, 2016

学生FDメンバーが考える 「学生が求めるよい講義・演習とは」

藤田小矢香・長島 玲子・吾郷美奈恵

概 要

学生FD (Faculty Development) が日々の活動から考えている「学生が求めるよい講義・演習」について明らかにし、今後の講義・演習の改善に向けて検討することを目的に質的分析を行った。その結果【学習環境の基本となるもの】【科目の展開】【毎時の展開】【教職学の交流】【将来の展望】の5つのカテゴリーに整理できた。

今後の対策として、授業に集中できる環境作り、カリキュラムでの位置づけ、科目間の関連性、科目における方向性、細分化された毎回の授業の方向性を明確に示すことが必要である。学生が何をどのように学んでいくのか、どのように学習を深めていけば良いのか自ら考えることにつながることを示唆された。

キーワード：講義, 演習, 学生FD

I. はじめに

日本の大学教育改革は1991年の大学設置基準の大綱化から始まる。2008年に(Faculty Development: 以後FD)が義務化され、全ての大学でFDの取り組みが始まったが、授業改善に学生の声を活かす発想はほとんどなかった。大学において授業アンケートが登場したが、アンケートによる授業や教育の改善は微々たるものであった(木野, 2015)。

A大学では、各キャンパスを統括するFDセンターが設置されている。看護学部のあるBキャンパスでは、FD委員会が授業改善に向けて各科目の授業終了後に「学生による授業アンケート」の実施や「教員によるフィードバックレポート」の作成と公開、教職員による「授業参観」「FD研修会」等の取り組みを行っている。

しかし、教職員だけでのFD活動に限界を感じ、2014年6月にA大学看護学部で学生FDが活動を開始した。メンバーは、公募で募り学生

FD委員を委嘱した。学生FDとは「授業や教育の改善に関心を持つ学生が、その改善のために学生自身が主体的に取り組む活動であり、大学側との連携を求めるもの」(木野, 2015)である。A大学看護学部での学生FD活動の内容は、看護学部でのよりよい講義・演習・実習に向けて、他大学との交流や学生FDサミットへの参加を通して情報収集を行っている。また、学生FDは週1回程度のミーティングで意見を出し合い、学生が主体となって大学をよくするには何ができるのかお互いの意見を共有し、検討を行っている。

本調査の目的は、学生FDが日々の活動から考えている「学生が求めるよい講義・演習」について明らかにし、今後の講義・演習改善について検討することである。

II. 方 法

1. 調査対象

2015年度A大学看護学部学生FDのメンバー

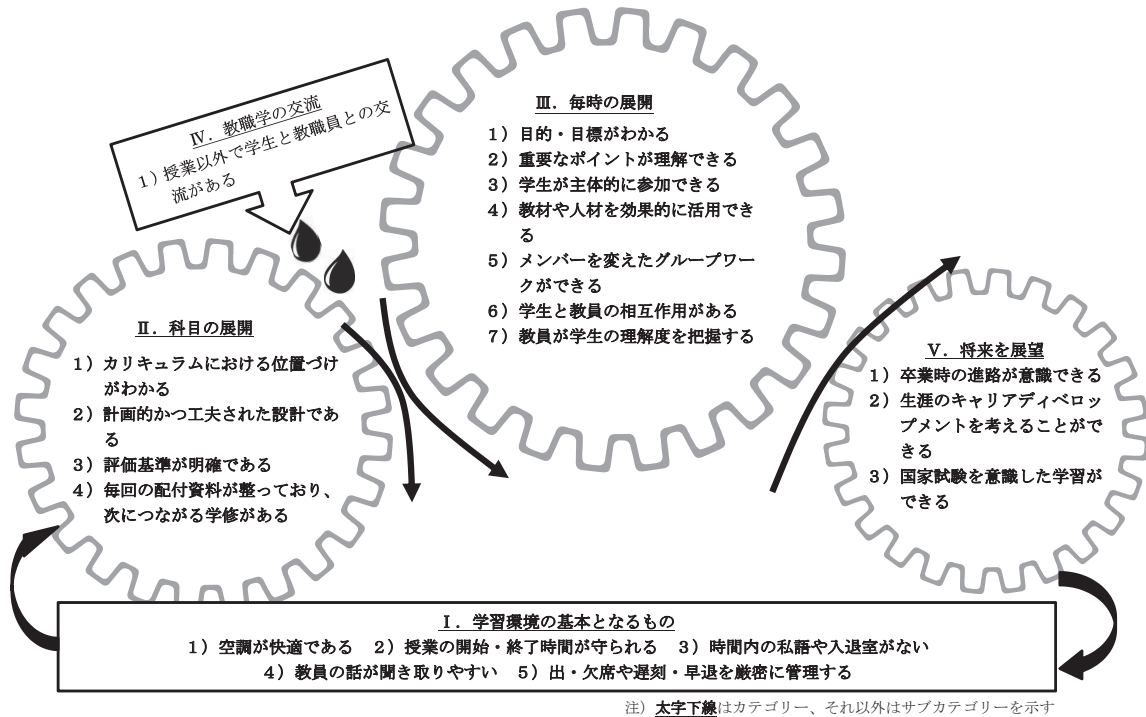


図 学生が求めるよい講義・演習

が記載した「学生が求めるよい講義・演習とは」についてのラベル 53 枚である。

2. 調査方法

学生 FD メンバーとして活動を通して感じている「学生が求めるよい講義・演習とは」について、ラベルの枚数には制限を設けず、無記名で記載し、提出用封筒に入れ所定の場所に提出を求めた。調査期間は平成 28 年 1 月である。

3. 分析方法

分析は、共同研究者で分析に偏りがないうまくチェックしながら、納得いくまで検討を行い、妥当性を確保した。「学生が求めるよい講義・演習とは」をテーマに類似性に従って分類し、カテゴリとして命名し、図解した。

4. 倫理的配慮

研究参加の同意を得る際に、文書と口頭で研究目的と方法について説明を行った。研究への参加は自由意思に基づくものであること、研究への参加・不参加によってなんら利益・不利益を生じないこと、研究への参加に同意した後で

も分析前までであれば参加を取りやめることができ、その際もなんら不利益を生じないことを説明した。また、研究データの使用目的と管理、守秘義務について説明し、学業や学生 FD 活動とは一切関係がないことを伝えた。研究への参加は同意書への署名によって確認した。

なお本研究は島根県立大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号 152)を経て実施した。

III. 結 果

1. 研究協力者の概要

ラベルを記載した研究協力者は 2015 年度学生 FD メンバー 23 名(1 年生 3 名, 2 年生 8 名, 3 年生 9 名, 4 年生 3 名)のうち研究協力によりラベルを提出した 8 名(1 年生 1 名, 2 年生 1 名, 3 年生 5 名, 4 年生 1 名)である。

2. 看護学部学生 FD が考える「学生が求めるよい講義・演習とは」

提出されたラベルは 53 枚で、全てをコードとして採択した。分析の結果 20 サブカテゴリ、5 カテゴリに整理された(図)。以下()はコー

ド、《 》はサブカテゴリー、【 】はカテゴリーを示す。

1) 【学習環境の基本となるもの】

(講義室の温度や湿度が適切に保たれている)から《空調が快適である》、(時間内に授業が終わる)等から《授業の開始・終了時間が守られる》、(私語や入退室がない)などから《時間内の私語や入退室がない》、(教員の声が聞き取りやすい)から《教員の話が聞き取りやすい》、(きちんと出席をとる)から《出・欠席や遅刻・早退を厳密に管理する》の5つのサブカテゴリーに整理された。良い講義・演習を行うために必要な【基本となるもの】として、学ぶ環境が整備されていることが必要であると考えていた。

2) 【科目の展開】

(他の講義との関連がある)から《カリキュラムにおける位置づけがわかる》、(レジュメがわかりやすい)(その年の学年に合わせた組み立てが成された授業)等から《計画的かつ工夫された設計である》、(教員間で指導方法が統一されている)から《評価基準が明確である》、(次につながる授業)(達成感・満足感がある)等から《毎回の配布資料が整っており、次につながる学修がある》の4つのカテゴリーに整理された。これらより【科目の展開】を理解する必要性を感じていた。

3) 【毎時の展開】

(大切なポイントが明確である)(授業の最初に流れを説明してくれる)等から《目的・目標がわかる》、(授業の進め方が上手い)(説明が分かりやすい)等から《重要なポイントが理解できる》《学生が主体的に参加できる》、(購入した教材を適切に用いる)(視聴覚教材を使って分かりやすい授業)等から《教材や人材を効果的に活用できる》、(グループワークの時、グループ分けを出席番号順のみにしない)から《メンバーを変えたグループワークができる》、(質問や意見交換できる雰囲気である)(学生の意見を反映してくれる授業)等から《学生と教員の相互作用がわかる》、(自分の学びを振り返る時間がある)(学習の進展に合わせて適時フィー

ドバックが求められる)等から《教員が学生の理解度を把握する》の7つのカテゴリーに整理された。1つ1つの講義・演習についての【毎時の展開】を理解する必要性を感じていた。

4) 【教職学の交流】

(授業以外で教員と学生の交流がある)から《授業以外で学生と教職員との交流がある》が導き出された。大学内での【教職員との交流】を求めている。

5) 【将来の展望】

(現場の声や、国家試験問題を盛り込んだ、今度に生かせる資料を使った授業)から《卒業時の進路が意識できる》《生涯のキャリアディベロップメントを考えることができる》、(将来の指針を見いだせる授業)から《国家試験を意識した学習ができる》の3つのカテゴリーに整理された。大学で学ぶ中で【将来の展望】を見すえていた。

IV. 考 察

A 大学学生 FD の活動は3年目となり、他大学との交流の場の1つである「学生 FD サミット」への参加や、学内での学生 FD 活動を通して様々な意見を持っていた。

今回《空調が快適である》《授業の開始・終了時間が守られる》《時間内の私語や入退室がない》《教員の話が聞き取りやすい》《出・欠席や遅刻・早退を厳密に管理する》から【学習環境の基本となるもの】とが示された。渡邊(渡邊, 2002)は学習環境について、「学習環境は、場所や設備・装置などのハード面だけではない。」と述べている。続けて渡邊(渡邊, 2002)は「学習者がリラックスしてアットホームな関係性の中で学べるような雰囲気作りが重要である。明るさ、オープンさ、なごやかさ、などが求められる」と述べている。《空調が快適である》というハード面だけでなく、授業に集中できる環境作りの一つとして雑音と感じてしまう私語への対応、授業中に気になる他者の入退室への対策等学生とともに検討が必要である。他者が愉快と

感じる私語やきままな入退室が自由でオープンではないことを再度周知する必要がある。

《カリキュラムにおける位置づけがわかる》《計画的かつ工夫された設計である》《評価基準が明確である》《毎回の配布資料が整っており、次につながる学修がある》から【科目の展開】が示され、さらに《目的・目標がわかる》《重要なポイントが理解できる》《学生が主体的に参加できる》《教材や人材を効果的に活用できる》《メンバーを変えたグループワークができる》《学生と教員の相互作用がわかる》《教員が学生の理解度を把握する》から【毎時の展開】が導き出された。山岸ら（山岸，2004）は医学教育における調査において「現代の学生は『学習意欲』はあっても、どのように学習するのか、どこまで学習するのかといった『学習の方向性』が見いだせていない。その方向性を導いて満足させる手段の一つとして『板書・プリント』が有効であることが分かった。また新たに方向性を導く手段として『シラバス』の作成が各大学で行われている」と述べている。学生の学習の方向性を示す有効な手段として、シラバスや配付資料等が整っていることを希望している点で先行研究と同じ結果であるといえる。カリキュラムでの位置づけ、科目間の関連性、科目における方向性、細分化された毎回の授業での方向性を明確に示すことで、学生は何をどのように学んでいくのか、どのように学習を深めていけば良いのか自ら考えることにつながるのではないかと考える。

《授業以外で学生と教職員との交流がある》から【教職学の交流】が示された。【教職学の交流】は【科目の展開】と【毎時の展開】の歯車が上手くかみ合うようにする潤滑剤のような意味合いがあると考えている。《授業以外で学生と教職員との交流がある》ことで、お互いに親しみを感じ、言葉を交わしやすく、躊躇無く質問や意見を伝えあえると考えられる。

《卒業時の進路が意識できる》《生涯のキャリアディベロップメントを考えることができる》《国家試験を意識した学習ができる》から【将来の展望】が導き出された。大塚ら（大塚，2013）らはキャリア計画と支援の在り方について看護

師として就職した後に専門看護師や認定看護師などスペシャリストを思考する学生が6割いたことを挙げ、「就職先を選定する際に重要視した項目には、継続教育や興味ある看護ができることをあげていた。これは、将来の自己像を見据えその実現化に向けて、キャリアアップのためのシステムや看護モデルの存在を期待していることを示していると思われる」と述べている。

A 大学看護学部の学生は卒業を条件に、看護師国家試験と保健師国家試験（選択制）の受験資格をもつ。また、就職も資格取得が条件となっている。そのため、大きな目標の1つに国家試験に合格することが挙げられる。また、就職した後について、学生の頃から意識して《卒業時の進路が意識できる》《生涯のキャリアディベロップメントを考えることができる》ことを学生は講義・演習において求めており、卒業後の将来像に近づくためのカリキュラムに期待していることが示された。

V. 結 論

学生FDが考える「学生が求めるよい講義・演習」について以下のことが明らかとなった。

ラベル53枚から20のサブカテゴリーが抽出され、さらに【学習環境の基本となるもの】【科目の展開】【毎時の展開】【教職学の交流】【将来の展望】の5つのカテゴリーに整理された。

授業に集中できる環境作りの一つとして他者の入退室の雑音への対応が必要である。また学ぶ方向性を導いて学生が満足できる手段の一つとしてカリキュラムでの位置づけ、科目間の関連性、科目における方向性、細分化された毎回の授業の方向性を明確に示すことで学生は何をどのように学んでいくのか、どのように学習を深めていけば良いのか自ら考えることにつながることを示唆された。【教職学の交流】は【科目の展開】と【毎時の展開】をスムーズに展開させ、その後の【将来の展望】につながっていくものと考えられる。

謝 辞

本研究に快くご協力をいただきました学生

FD 縁～えにし～の皆様に深謝いたします。

(本研究は、平成 27 年度特定テーマ研究費の助成を受けて行った。)

文 献

- 木野茂 (2015) : 学生, 大学教育を問う, 2-3, ナカニシヤ出版, 東京.
- 木野茂 (2015) : 学生, 大学教育を問う, 10, ナカニシヤ出版, 東京.
- 大塚真代, 古米照恵, 藤野文代 (2013) : 看護大学生の進路選択に影響する情報と支援ニーズ—卒業を間近にした看護学部 4 年次生への調査—, ヒューマンケア研究学会誌, 5 (1), 73-77.
- 渡邊洋子 (2002) : 生涯学習時代の成人看護学—学習者支援へのアドヴォカシー—, 228, 明石書店, 東京.
- 山岸秀嗣, 寺野彰, 桂大輔 他 (2004) : 学生アンケート調査による授業評価とその問題点, Dokko Journal of Medical Sciences, 31 (3), 209-216.

The Good Lecture and Practice that Nursing Students Hopes, The Member of Student Faculty Development Considered

Sayaka FUJITA, Reiko NAGASHIMA and Minae AGO

Key Words and Phrases : Lecture, Practice, Student Faculty Development